

文庫とその周辺——Corvaia, Bernstein, Gerits¹

La collection et ses alentours : Corvaia, Bernstein, Gerits The collection and its surroundings : Corvaia, Bernstein, Gerits

福島 知己

Tomomi FUKUSHIMA

早稲田大学の通称「コルヴェア文庫」は、正式には「フランス経済・社会・思想文庫」を名乗る。その名の通り、フランスの16世紀から19世紀にかけての社会思想を中心としたおよそ1万点からなるコレクションである。早稲田大学はこの文庫を1988年に購入し、現在は中央図書館の貴重書室に保存している。本稿では、コルヴェア文庫について考える糸口として、誰がどのようにしてこの文庫をつくったのかを検証したい²。そのことを通じて、大学図書館が所蔵する「文庫」を研究する視点について若干の考察をおこなうのが、本稿の目標である。

1. コルヴェアとは誰か

コルヴェアが誰かについては、一見して難しくない。早稲田大学が本文庫を購入する前に販売元である紀伊國屋書店が作成した売り込み用の冊子³には、『コルヴェア男爵文庫』と題がつけられ、文庫がおよそ1万冊からなること、それがもともと19世紀前半のコルヴェア男爵の収集した資料を起源とすることが記されている⁴。この冊子の記述を頼りにしつつ、『イタリア人伝記事典』などを参照して、コルヴェア男爵についてまとめれば、大略以下ようになる⁵。

¹ この企画にお誘いいただきました坂倉裕治先生、資料の利用を快くご承諾くださいました早稲田大学図書館貴重書室のみなさまに深く感謝申し上げます。

² 今日の分析書誌学の礎を築いたひとりであるフレッドソン・パウアーズは、『書誌記述の諸原理』において、分析書誌学上の証拠とは物的対象としての書物そのものから得られるものであって、あらゆる外的状況は「副次的証拠」にすぎないと述べている (Fredson Bowers, *Principles of Bibliographical Description*, Princeton University Press, 1949, p. 33)。その意味では、書物についての書誌学的研究として、本稿は副次的証拠を示すものにすぎない。ところで、本稿の課題は「文庫」についての研究であり、その場合は副次的とはいえない。

³ こういう冊子には導入の経緯を探るうえで重要な情報が入っている場合があるので、早稲田大学図書館がこれを処分せず保管していたのは大いに見識のあることといえる。

⁴ 『Corvaia 男爵文庫』紀伊國屋書店、出版年不明。

⁵ 以下、M. Ganci, “Corvaia, Giuseppe Nicola”, *Dizionario Biografico degli Italiani*, vol. 29, 1983による。以下の電子版がある。https://www.treccani.it/enciclopedia/giuseppe-nicola-corvaia_%28Dizionario-Biografico%29/ [2024年1月21日最終確認]

コルヴェア男爵はイタリアのシチリア島に起源をもつ貴族の一員である⁶。ジュゼッペ・ニコラス・コルヴァイヤは1785年に、シチリア島のちょうど真ん中にあるカラシベッタという町の男爵家にうまれた。長じて1810年から政治的活動を開始。1820年にカルボナリ党の陰謀事件にかかわり、逮捕され、1822年から24年まで獄中にいた。当時のシチリアは、イタリア統合の以前であり、ブルボン家の流れを汲む王によって支配されていた。フランスで革命が勃発した際にシチリア王国は独立を守ったが、革命運動の息吹はシチリア島にも入ってきており、コルヴァイヤは反王権の自由主義運動に参加したのである。

1824年に国王特赦によって自由の身を得たコルヴァイヤはシチリア島を離れ、ナポリに移って、ワインの醸造をなりわいとした。当時彼は他の醸造家たちと、醸造技術についてだけではなく社会問題なども含めて、かなり自由闊達な議論を交わしていたらしい。仲間との共同醸造事業の企画がナポリ王国の政府の支持を得られずに頓挫したのをきっかけに、パリに移った。おそらくコルヴァイヤの改革構想はそのときすでにできあがっていたと考えられる。1837年にパリで彼は、最初の著作である *Le nouveau monde, projet financier pour arriver à une complète réforme sociale* (訳せば、『新世界、完全な社会改革を到来させるための金融計画』) を発表した。

その後コルヴァイヤはトリノ、ついでミラノに移動し、自説の宣伝を続けた。そして支援者を得て、1840年に主著である *La Bancocrazia o il Gran libro sociale, novello sistema finanziario che mira a basare i governi su tutti gl'interessi positivi dei governati* (『バンコクラツィア』) を2巻本で発表した⁷。

コルヴァイヤはヨーロッパ各地を転々としながら、自説の宣伝を続けた。主な地域に限っても、スイス、パリ、マルセイユ、ナポリ、マルタ、さらに故郷シチリア島のパレルモ、トリノ、ロンドン、ベルギーへと晩年まで次々に移動している。その間、コルヴァイヤはたびたび当局に呼び出された。彼が逮捕されなかったのは、当時の状況において、追放を条件に、身の安全が保証されたからかもしれない。1853年に「千人会」(Società de' millennari) という自説宣伝のための組織の設立を宣言したときも、おそらくこれが秘密結社的と判断され、ピエモンテ州から追放の憂き目を見た。

コルヴァイヤは1859年にパレルモに戻り、翌年死去した。ガリバルディのシチリア征服に続いてイタリアが統一へと向かう最中のことだった。

コルヴァイヤの構想をひとことで言えば、国営の貯蓄金庫を作るという構想である⁸。貯蓄金

⁶ Corvaia (Corvaja の綴りもある) をイタリア語風にコルヴァイアないしコルヴァイヤと読んでもよいが、男爵家がフランス語圏のスイスに住居をもち、長く居住していたことを踏まえ、文庫導入時に早稲田大学図書館で議論の末、フランス語式の読み方を採用し、「コルヴェア文庫」を日本語名称にしたという。雪嶋宏一先生のご教示による。

⁷ CiNii Research を使って検索した限りでこの本は日本国内の大学図書館に所蔵がみつけれなかった。ただしドイツ語版が一橋大学のメンガー文庫に入っており、調べた範囲では、これが日本にある唯一のコルヴァイヤの本ということになる。

⁸ 以下 *Le baron Corvaja, Le nouveau monde, projet financier pour arriver a une complète réforme sociale, présenté aux Assemblées nationales de la France et de l'Angleterre, et a tous les autres gouvernements*, Imprimerie d'Edouard Proux, 1837 による。

庫は、日本で言えば郵便貯金がおこなってきたものを想像すればよいが、勤労者の小口の貯蓄を受け入れることによって生計の安定を促すとともに、その資金を集めて公共事業への融資をおこなうものである。コルヴァイヤによれば、預金者は貯蓄金庫への預金をもとに、いわばクレジットカードのようにして買い物ができるようになるし、利子も得られる。貯蓄金庫側から見ると、タンス預金ではなく資本が集中するので、投資に振り向けられる。コルヴァイヤの構想は、国営の貯蓄金庫によって、民間の銀行のような私的利益を優先した金融活動を牽制でき、さらに国際的に資金を融通し合うことによって、各国の財政を安定させ、国債の速やかな償還に資するというものだった。

そうなってくると、国営貯蓄金庫と切り離された国家独自の役割というもののがほぼ消滅するというのが、コルヴァイヤの見立てである。つまり、コルヴァイヤが「バンコクラシー」と呼んでいるのは、国営貯蓄金庫が国家のかわりをなす体制なのである⁹。その意味では「政治」を「経済」ないし「金融」に還元していることになる。

フランスは19世紀前半に銀行制度を発達させた。パリ貯蓄金庫が設立されたのは1818年のことだったが、その後、七月王制下（1830年7月以降のこと）では、金融資本が中心となって、産業の近代化と巨大化が進められた¹⁰。この時期、鉄道の敷設やさまざまな工場の建設などによって、フランスはそれまでの農業、手工業中心の産業体制からしだいに転換を遂げた。その担い手となった金融資本家「オートバンク」には急激に富が集中することになり、やがて「金融貴族」と呼ばれるほどになった。金融貴族による独占をやめさせるための、いわばオルタナティブな信用構想として、当時いくつかの銀行構想が提案された。やがて1840年代後半にブルードンのような人物も交換銀行の構想を打ち出し、それをもとにした人民銀行が1849年にごく短期間ながら実現することになる¹¹。コルヴァイヤの構想は、このような一連の動きとも関連させて考えることができそうである。

興味深いのは、コルヴァイヤの場合、この構想が、行きすぎた個人主義を廃して利他主義を広め、公共の利益に貢献するという一種の道徳的な実践として描かれていることである。コルヴァイヤは大枠でいうと、自由主義または社会主義の思想に分類される。専制主義への反対という意味では自由主義だし、経済的主張には当時の意味で社会主義的と呼べるものも含まれる。もちろん現代風の語感で社会主義という言葉が意味しているのとは違う。コルヴァイヤは実業家として名を挙げたわけで、その改革構想は、社会事業家とか社会活動家といった言い方が近い。後年、サン＝シモン主義者たちがルイ・ナポレオンの第二帝政のもとで社会や経済の近代化に大きな役割を果たしていくのと同じようなものを感じさせるが、コルヴァイヤがどこま

⁹ Cf. Le baron Corvaïa, *L'emprunt, projet financier présenté à M. Humann, suivi d'un Catéchisme populaire financier mis à la portée des prolétaires*, 2^e éd., Delloye, 1841.

¹⁰ 矢後和彦『フランスにおける公的金融と大衆貯蓄 預金供託金庫と貯蓄金庫 1816-1944』東京大学出版会、1999年、第1章を参照。

¹¹ ブルードンの信用改革構想については諸種の文献がある。最近のものとして、高橋聡「P.-J. ブルードンの互酬経済の原理」、『関西大学経済論集』第71巻、2022年。

でサン＝シモン主義の影響から出発したかは別途検討されるべきである¹²。

2. コルヴェア文庫の内容

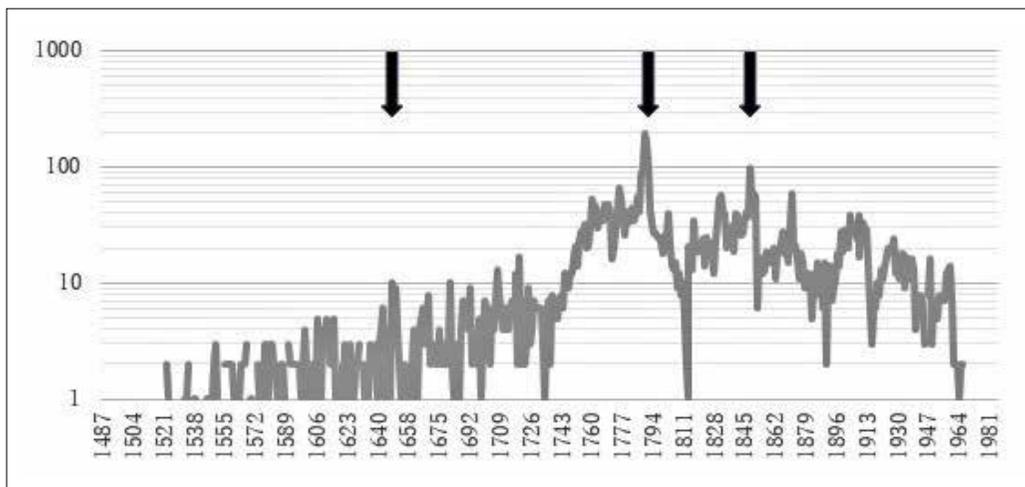
つぎに文庫の内容を簡単にみていこう。

ジュゼッペ・コルヴァイヤ自身の本はこの文庫に含まれない。またイタリア語の本もわずかにすぎない。基本的には、フランス語の文献から構成されている。

冒頭で紹介した紀伊國屋書店作成の提案書には文庫に含まれる資料の点数を著者ごとにまとめたリストが付属されているが、そこで最も多いのはフーリエ主義グループのリーダーだったヴィクトル・コンシデランの著作で49点、ついでフランス革命の立役者のひとりミラボー伯爵の著作40点、サン＝シモン（いわゆる「空想的社会主義者」のほう）の著作39点、18世紀フランスの経済学者デュポン・ド・ヌムールの著作37点、と続く。

時代別に見ると、17世紀以前の著作は相対的に少ないが、その中では1640年～50年前後の作品が比較的目に付く。18世紀では、重農学派や重商主義など経済学者の文献、慣習法にかかわる文献などもある。全体としては、表1のように、1640年代のマザリナード期、18世紀後半のフランス革命直前の時期、そして1848年の二月革命にむけた時期の著作が多く含まれている。なかでも19世紀のいわゆる初期社会主義者（サン＝シモン主義、フーリエ主義、カベ、プルードンなど）の著作が大半を占める。19世紀後半ではマルクスの『資本論』のフ

表1 コルヴェア文庫収蔵文献の刊行年別資料数。早稲田大学図書館の蔵書検索サイトWINE (<https://waseda.primo.exlibrisgroup.com/>) の検索結果をもとに作成。横軸は刊行年、縦軸は資料数の対数表示である。書誌数による統計でありタイトル数や冊数とは異なる場合があるほか、刊行年の記載されていない資料は除いているなど、厳密な正確さを目指したものではないが、おおよその傾向を示す。



¹² 1838年頃からコルヴァイヤと深い友情を結ぶことになるミケーレ・バルマは、すでに1835年にサン＝シモン主義に関する著作を出版したことがあった。

ランス語訳などもあるが、クルノー¹³やワルラスなど数学を利用した経済学者の著作もある。

伝記や著作の特徴から、特に銀行にかかわる文献はコルヴァイヤの関心に直結しているといえる。プルドンらのものだけではなく、デュボン・ド・ヌムールやラヴォワジェなど、18世紀の著者による銀行論も含まれる。

数少ない英語文献では、ホブズやマルサスの原著が目につく。

ドイツ人の著作では、フランス語訳だが、カントの『永遠の平和のために』が異彩を放つ。これはそのフランス語版の序文を書いている Charles Lemonnier とのつながりで収集されたとも考えられる。というのは、Lemonnier はサン＝シモンの著作の編者でもあるからで、すなわちサン＝シモン主義の文献を集める過程で収集されたものかもしれない。もっとも、他の接点も考えられる。ヨーロッパ連合の構想は長年の歴史をもつので、その関連で手に入れたかもしれない。実際、Castel de Saint-Pierre の1713年の著作『ヨーロッパ恒久平和試論』*Projet pour rendre la paix perpétuelle en Europe* も文庫に含まれている。18世紀の旅行記も多く含まれるが、それらはトマス・モアの『ユートピア』の関連著作を集める過程で収集されたものと考えられる。同様に、Lahontan の旅行記が収集された理由も、その続編を名乗る著作が Nicolas Gueudeville によって執筆されたからだ、と推測できるかもしれない。Gueudeville は1715年にトマス・モアの『ユートピア』のフランス語訳を翻訳出版した人物だからである¹⁴。

ところで、先ほどのカントの本は1880年の本である。また、この文庫には20世紀の資料も含まれている。多くは研究文献で、サン＝シモン主義やフーリエ主義をはじめとする19世紀の社会主義者についての研究書だったり、あるいはブローデルの『地中海』なども含まれている。コルヴァイヤは1860年に死去しているから、これらは本人が収集したものではない。つまり、この文庫は、ジュゼッペ・ニコラス・コルヴァイヤの収集文献以外にも含まれる。これが何を意味するかは、後で立ち返ることにしよう。

なお、コルヴァイヤの伝記的事項を説明したときに紹介した「千人会」の構想について、『伝記事典』では、シャルル・フーリエの説に発想したものだと記されているが、管見では特にフーリエの発想と似たものを感じとれなかった。むしろトンマーゾ・カンパネッラの『太陽の都』が連想される。カンパネッラは、17世紀前半にイタリア南部カラブリアを当時の支配国スペインから解放しようとする運動の首謀者と目されて、投獄された。獄中であって、トマス・モアの『ユートピア』にも刺激をうけながら独自のユートピア構想を描いたのが、『太陽の都』である。カンパネッラは太陽の都と呼ばれる都市が同心円状の構成をなすと述べているが、千人会も同様の同心円状の構成を重視している。ところで、コルヴェア文庫にはカンパ

¹³ 1838年の著作も含まれる。

¹⁴ 森見登美彦の小説『夜は短し歩けよ乙女』を読んだことがあれば、古本市の神を名乗る少年が叫ぶ「本はみんなつながっている」というセリフを思い浮かべられるかもしれない。セリフはこう続く。「本たちがみな平等で、自在につながりあっている……。その本たちがつながりあって作り出す海こそが、一冊の大きな本だ」。森見登美彦『夜は短し歩けよ乙女』角川文庫、2008年、109-111頁。それは系統樹とは異なる、連想によって広がり、偶然の出会いにも左右されて縦横に展開される世界である。

ネッラの著作を 19 世紀に François Villegardelle がフランス語訳したものが収録されている。Villegardelle による序文を読むと、プラトン、トマス・モア、カンパネッラというユートピア文学の系譜の継承者をサン・シモンやフーリエとみなす考え方を示しており、さらに多くの点でカンパネッラとフーリエに共通点があると述べている。ユートピア思想の延長線上に初期社会主義的な思想を置く考え方は、19 世紀前半にはじめて生まれた¹⁵。Villegardelle はフーリエ主義の周辺で活躍していた人物なので、ひいきの引き倒しのようなところもあるかもしれないが、当時の認識としてカンパネッラとフーリエの両者を同一平面上で理解する傾向があったかもしれない。

以上を踏まえていえば、このコルヴェア文庫はある種「書物でたどる近代フランス経済・社会思想史」といえるのではないかと思う。その中でも 19 世紀の初期社会主義思想や労働運動にかかわる資料が重視されている。

労働運動にかかわる文献を収集・分析し、ひとつの思想史を描こうという試みは、20 世紀前半、第 1 次世界大戦と第 2 次世界大戦のあいだのいわゆる戦間期に、はじめて組織的に開始された。そのヨーロッパでの中心のひとつはアムステルダム为社会史国際研究所、そしてもうひとつはイタリアのフェルトリネッリ研究所だった。いま法政大学の付属になっている大原社会問題研究所が設立されたのは 1919 年だから、ほぼ同時代の出来事である¹⁶。

3. コルヴェア文庫の成立事情

すでに述べたとおり、コルヴェア文庫が早稲田大学に入ったのは 1988 年だった。現在の大学図書館はデータベースの利活用に焦点が移っているが、当時は社会科学系の洋書の蔵書数を増やすことがたいへん重視されていた。あらためて言うまでもないが、洋書の輸入は高度経済成長期以降に飛躍的に増大した。その中で、文庫というまとまりで購入するということが起こってきた。一橋大学は 1974 年にパート・フランクリン文庫を購入し、1977 年には専修大学がミシェル・ベルンシュタイン文庫を購入した。エポックメイキングな年が 1978 年である。というのは、この年から国立大学に社会科学系の洋書（社会科学系には限られないが、ほとんどは社会科学系）をまとめたいわゆる「大型コレクション」の購入が予算化されたからである。当時日本では、いわゆる「黒字減らし」、つまり貿易収支の大幅な黒字を背景に諸外国

¹⁵ 田村秀夫『ユートピアと千年王国 思想史的研究』中央大学出版部、1998 年の第 1 章を参照。

¹⁶ 社会史国際研究所については機関誌である *Bulletin of the international Institute of Social History* やウェブサイト (<https://iisg.amsterdam/> [2024 年 1 月 21 日最終確認]) などを参照。フェルトリネッリ研究所は、ジャンジャコモ・フェルトリネッリという、裕福な家庭の出身で共産党に身を投じた人物がつくった研究所である。その息子が記した伝記が日本語に訳されている（カルロ・フェルトリネッリ『フェルトリネッリ イタリアの革命的出版社』麻生九美訳、晶文社、2011 年）。またウェブサイト (<https://fondazionefeltrinelli.it> [2024 年 1 月 21 日最終確認]) や、Victoria de Grazia, “The Giangiacomo Feltrinelli Institute”, *International Labor and Working-Class History*, Volume 2, 1972, pp. 19–21 を参照。

から為替相場の是正を求める圧力が強まったのを躲そうとして、高額な外国産品を買おうとした動きが強まっていたので、その関連もあったと考えられる¹⁷。初年度の大型コレクションは、北海道大学のヴェルナツキー・コレクションとボリス・スヴァーリン・コレクション、東京大学のマザリナード・コレクション、一橋大学の「近代ヨーロッパ社会科学貴重書」、九州大学のシャルル・ペラ文庫だった。

コルヴェア文庫に話を戻す。この文庫は紀伊國屋書店が早稲田大学に売却したもののだが、もともとはデッカー・アンド・ノルドマン書店というヨーロッパの有力な古書店にいたアントン・ゲーリッツという人物が、紀伊國屋書店に話をもちかけたものだった。

ゲーリッツは1930年にオランダのハーグで生まれた。若いときからナイホフという有名な古書店で修行し、稀覯書の担当者として名を挙げた。その後、ロゼンタール書店や、デッカー・アンド・ノルドマン書店などで働き、1981年に独立。息子のアルノウト氏と古書店を営んでいたが、2021年12月3日に逝去した¹⁸。

ゲーリッツ書店は今もアルノウト氏が引継ぎ、経営を続けている。ウェブサイトを見ると、アントン・ゲーリッツが流通にかかわった文庫の数々が掲載されている¹⁹。先ほど挙げた「大型コレクション」では、ベルンシュタイン文庫、ボリス・スヴァーリン・コレクション、マザリナード・コレクション、シャルル・ペラ文庫。また名古屋大学のドルバック・コレクションもゲーリッツによるものである。1970年代以降の日本の大学図書館の社会科学系洋書の文庫導入にあたってゲーリッツが果たした役割の大きさが垣間見える。

ゲーリッツは日本びいきで、何度も来日したことがあった。1980年に訪日した際に日本古書籍商協会の依頼でおこなった講演が、『日本古書通信』に掲載されている²⁰。コルヴェア文庫導入後、1990年10月にも、早稲田大学の招きで来日した²¹。目的はコルヴェア文庫の整理指導と記念展示の準備だった²²。

¹⁷ 戸川継男「スラ研の思い出(第10回)」、『スラブ研究センターニュース』第84号、2001年を参照。「…1978年(昭和53年)という年は、日本政府が「ドル減らし・外貨減らし」を積極的に行なった最初の年であった。この年の9月、政府は経済対策閣僚会議で、ドル減らしのため美術品15億円、洋書5億円の補正予算支出を決定した」。

¹⁸ 以下を参照。https://nvva.nl/in-memoriam-anton-gerits/ [2024年1月21日最終確認]

¹⁹ <http://www.agerits.nl/about/> [2024年1月21日最終確認]

²⁰ 「アムステルダムのゲーリッツ氏に聞く ABAJ 講演会」、『日本古書通信』第45巻第9号、1980年。

²¹ 以下を参照。「ゲーリッツ氏を招いて」、『ふみくら 早稲田大学図書館報』第28号、1991年2月。『早稲田大学図書館業務報告』第4巻第4号、1990年。Anton Gerits「Views of an European modern and antiquarian bookseller 西ヨーロッパ古書籍業事情および大学図書館員と書籍業者とのかわり ヨーロッパ書籍業者の意見」、『早稲田大学図書館紀要』33、1991年。

²² 洋書整理の仕方を教えてもらうために専門家を招くというやりかたは他にも例がある。一橋大学の場合、先述のバート・フランクリン文庫購入の際、1975年に、ハーバード大学で社会科学資料の蔵書として名高いクレス文庫のキュレーターであったケネス・カーペンター氏を招き、文庫の整理を依頼した。細谷新治「「バート・フランクリン文庫」の調査の思い出」、『一橋大学社会科学古典資料センター年報』第1号、1981年を参照。

ゲーリッツは自伝を著しており、この自伝からコルヴェア文庫売却の詳しい経緯がわかる²³。それによると、コルヴェア文庫の売却を最初にもちかけたのは、ゲーリッツの古書籍商仲間ミシェル・ベルンシュタインだったという。

ミシェル・ベルンシュタインは1906年にフランスのリヨンで、亡命ロシア人の両親のもとに生まれた。彼の父親の本名はLeonidだが、亡命後フランス語風にLéonを名乗ることになる。Léonはポリシェビキ体制に反対していたので1917年のロシア革命勃発後もリヨンにとどまったが、1922年にモスクワにマルクス＝エンゲルス研究所ができると、その所長を務めたリャザーノフに依頼されて、研究所の蔵書にするための古書をフランスで探す仕事を開始した。この仕事に付いていったことがきっかけで、ミシェル・ベルンシュタインもまた古書の収集に邁進することになった。

スターリン体制下になると、ベルンシュタイン父子はモスクワとの関係を断ち切られた。かわって、先ほど述べたアムステルダムの世界史国際研究所や、ミラノのフェルトリネリ研究所などのエージェントとして、フランス各地で古書の収集にあたることになった。その縁で古書商を営むことになり、アメリカのいくつかの大学図書館の他、ゲーリッツをはじめとする社会科学系の稀覯書古書店に仕入れた本を売却した。ベルンシュタインの古書の収集の方法というのは、フランス国内のあちこちで社会運動の実践家の遺産相続人のもとをまわって、その蔵書を買取りするというものだった。ミシェル・ベルンシュタインがこういうやりかたで収集したフランス革命期のパンフレット・コレクションが、やがて1977年に、ゲーリッツの仲介で、専修大学に売却されたわけである。

さて、ゲーリッツによれば、彼がベルンシュタインと共同でおこなったもうひとつの大きな事業が、コルヴェア文庫の売却だった。早稲田大学が1991年に開催したコルヴェア文庫の展示会の際のパンフレットでは、この文庫はジュゼッペ・コルヴェアの死後、その蔵書を核にして遺族により拡充されたもので、それにはミシェル・ベルンシュタインも多々助言をおこなっていた、とあるが²⁴、ゲーリッツはさらに複雑な経緯を示唆している。というのは、コルヴェア文庫は第二次世界大戦中に一度、ある歴史家（名前は不明）に売却された、というのである。この歴史家はサン＝シモン主義やフーリエ主義に関心をもって、資料を拡充した。それが再びコルヴェア一族のもとに戻ったか、あるいはその歴史家から直接買い取って、文庫がベルンシュタインの手に入った、とゲーリッツは推測している。

ベルンシュタインからコルヴェア文庫の売却先について相談を受けたゲーリッツが真っ先に考えたのが、日本だった。専修大学にベルンシュタイン文庫を売却する際に仲介をおこなった紀伊國屋書店に連絡したところ、まず紀伊國屋書店が買い取るようになった。その後文庫が早稲田大学に入るまでは10年あまりかかったようだ。早稲田大学は創立100周年と新中央図書

²³ 以下 Anton Gerits, *Books, Friends, and Bibliophilia. Reminiscences of an Antiquarian Bookseller*, Oak Knoll, 2004 を参照。

²⁴ 『フランス経済・社会・思想文庫（通称コルヴェア文庫）展示資料解題』早稲田大学図書館、1991年。

館の落成を記念し、この文庫を購入することにした。

さて、ここまでコルヴェア文庫成立の経緯についていくつかの指摘をおこなった。個々の本について誰が収集したか、何も確実なことが言えるわけではないが、その後どのように保存され、古書店を介して流通し、こうして大学図書館に収められたかを考えるとき、本文庫についてはコルヴェア男爵ひとりに帰すべきものでなく、代々の所有者やその移転にかかわったたくさんの人々がそれぞれの意図のもとでおこなった一種の「共同作業」の結果としてできあがった「構造体」であると言えるであろう²⁵。もちろん大学図書館の蔵書というのはそれ自体ひとつの構造体をなしているわけだが、コルヴェア文庫はその中であって、いわばひとつの小宇宙をなしている²⁶。ひとりの人物の考えが投影された書棚ではなく、数多くの人々の思惑や希望が交錯して形成されたものである。

4. フーリエ主義関係蔵書の内容

最後の話題として、コルヴェア文庫に含まれるフーリエ主義に関する文献についてやや詳しく見ていきたい。というのは、これから見るように、フーリエ主義文献はこの文庫において特権化された対象だったといえるからである。

コルヴェア文庫購入の際、おそらくベルンシュタインの記述をもとにタイプ打ちしたカード目録をコピーして製本したものが、一緒に持ち込まれた²⁷。早稲田大学図書館では、このカタログと現物資料とを照合し、実物の有無や記載内容の誤りなどの確認に用いた。

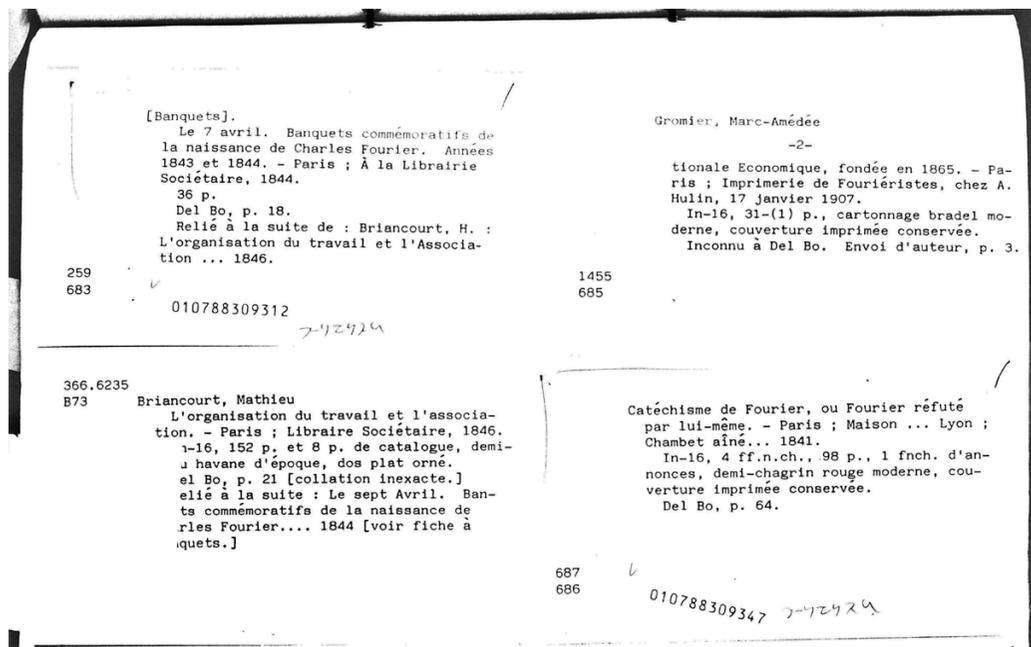
さて、ここにその1ページがあるが、よくみると、Inconnu à Del Boなどと記されているのがわかる。デル・ボというのは先ほど言及したフェルトリネッリ図書館の中心人物で、19

²⁵ 一橋大学社会科学古典資料センターのベルンシュタイン＝スヴァーリン文庫もまたゲーリッツが関与したコレクションであり、同様に、かなり拡充されている。この文庫では、レオン・ベルンシュタインの蔵書とフランス共産党創立メンバー（後に除名）のボリス・スヴァーリンの蔵書が合体されているだけでなく、さまざまな雑誌のリプリントが加えられている。その目的は、ロシア革命運動の歴史を書物を通じて語らせることであり、その意味で補遺は不可欠だった。

²⁶ なぜそれをコルヴェア文庫と呼ぶべきなのかということについて、ベルンシュタインがフランス革命史コレクションを専修大学に売却する際に送った原稿の中にある次のような文章を引用しておく。「1つの恐れが私につきまるとして離れなくなりました。……この努力のすべて、この何年にもわたる作業のすべて、私の宝とするコレクションが……私の死後売却され世界中に四散してしまうのではないかと懸念にとりつかれていたのです。……このようにしてこのコレクションは東京……にやって来ました。……このことこそ、ひとりのコレクターが、その生涯の終わりに味わい得る最大の満足と私には思えるのです」（ミシェル・ベルンシュタイン「革命期文庫についての覚書」、『専修大学ミシェル・ベルンシュタイン文庫だより』、創刊号、1980年、16頁。同号にフランス語の原文も掲載されている。訳文はこの原文をもとに少しだけ変えた）。今日では大学図書館は予算不足や書庫の狭隘化によって寄贈を受け入れることさえ困難になっているが、このように蔵書をまるごと受入れてもらい、さらに名前を残してもらうことは、蔵書家にとってこのうえない夢だった。そして友人の名前を残すのは、友情のあかしでもあった。

²⁷ 時々日本語の説明がついているので、紀伊國屋書店の手が加わったかもしれない。なお、ベルンシュタイン自身の手書きの書誌の一部が、紀伊國屋書店が作った売り込み用冊子で紹介されている。

図2 コルヴェア文庫のカード目録。Del Bo の書誌への言及がみえる。



世紀の社会運動史に精通しており、1956年にフェルトリネリ図書館が所蔵するフーリエとフーリエ主義に関する資料についてまとめた書誌を出版していた。ベルンシュタインはこの書誌にコルヴェア文庫の資料が掲載されているかを照合し、あればそのページ数を記し、なければ「Del Boになし」と記載したわけである。こういう配慮はひとつには古書商としての商業上の理由だし²⁸、もうひとつは純粋に文献学的な理由、資料収集上の興味である。

コルヴェア文庫の売却を仲介したゲーリッツはこの点に注目した。当時の事情を、ゲーリッツ自身が書き残した文章によって再現してみたい。

「コルヴェア文庫というまたとないコレクションをそのままのかたちで保ち、それを社会経済史についての研究センター兼図書館に配置するという考えに、なによりも私は惹かれました。そしてそれ以来私は、本の整理をしながら、私自身書誌学的研究をおこなうという大胆な計画を夢みるようになりました。……幸いなことに、友人であるミシェル・ベルンシュタインが手助けしてくれ、彼がつくっていた書誌を私に見せてくれました。[コルヴェア文庫の]本が目録にとられるとすぐ私のオフィスに運ばれ、私は夜や週末をつかってその本を検分することができました。そんな仕方では、私は書誌学者になるという私の夢を一部分叶えることができたのです。私はまずシャルル・フーリエとその学派についての本とパンフレット類の豊富なコレク

²⁸ 専修大学に収められたフランス革命資料についても、ベルンシュタインはフランス国立図書館に蔵書として収められているかどうかを逐一チェックしている。

ションに関心を集中させ、その後、サン＝シモンとその弟子たちの著作を検討しました」²⁹。

このようにしてゲーリッツは、フーリエ主義に関する書誌と、サン＝シモン主義に関する書誌を完成させ、出版することになった³⁰。つまり、コルヴェア文庫は早稲田大学に入る前にすでに学術的成果をうみだしていたことになる。

つぎに、コルヴェア文庫に含まれるフーリエ主義の文献のいくつかを紹介したい。まずフーリエについて考えるときに重要なのは、フーリエ自身の思想と、フーリエ主義者たちの行動とを分けて考察することである。時期的に考えても、フーリエの思想は1800年代から1810年代にかけて骨格が形成され、1820年代に大きな転換を被りつつ発展した。大きな転換というのは、1820年代になって、社会実験的な小さな共同体を形成するというプログラムが本格的に提唱されるようになるからである³¹。一方、フーリエの弟子たちは1820年代から徐々にかたちをつくるようになり、1830年代以降大きく発展していった。フーリエは1837年に死去するが、フーリエ主義の最盛期は1840年代である、と言えば、違いがわかりやすいかもしれない。

コルヴェア文庫についていえば、そこに含まれるのはフーリエに関する資料群というよりも、フーリエ主義に関する資料群といったほうが適切である。すでに述べたように、フーリエ主義グループのリーダーだったコンシデランの著作も多数含まれている。社会運動として大きな歴史的意義をもったのはフーリエ主義だから、これは十分に理解できる収集方針といえる。収集したのがコルヴェア自身だったか、それともおそらくそれを受け継いだ歴史学者だったか、あるいはベルンシュタインだったかはあまり重要でない。

もちろん、フーリエ自身の著書もコルヴェア文庫に網羅されている。その中で興味深いものを指摘するとすれば、『産業の新世界』の宣伝のために記された『告知小冊子』という題名の冊子があげられる。

フーリエは著作を広めるため、政治家やジャーナリストなど著名人に著書を献呈した。献呈が効果をもったかはともかく、献呈するときに内容を要約した手紙をつけたり、本の内容を点検して手書きで修正を加えたりするのを常にしてきた。『産業の新世界』出版の際に書かれたこうした手紙については、日本でも東北大学附属図書館や名古屋市立大学総合情報センターに保管されている。修正のほとんどは単なる誤植の修正だが、『告知小冊子』のコルヴェア文庫本では、題名の一部を修正しようとしている。

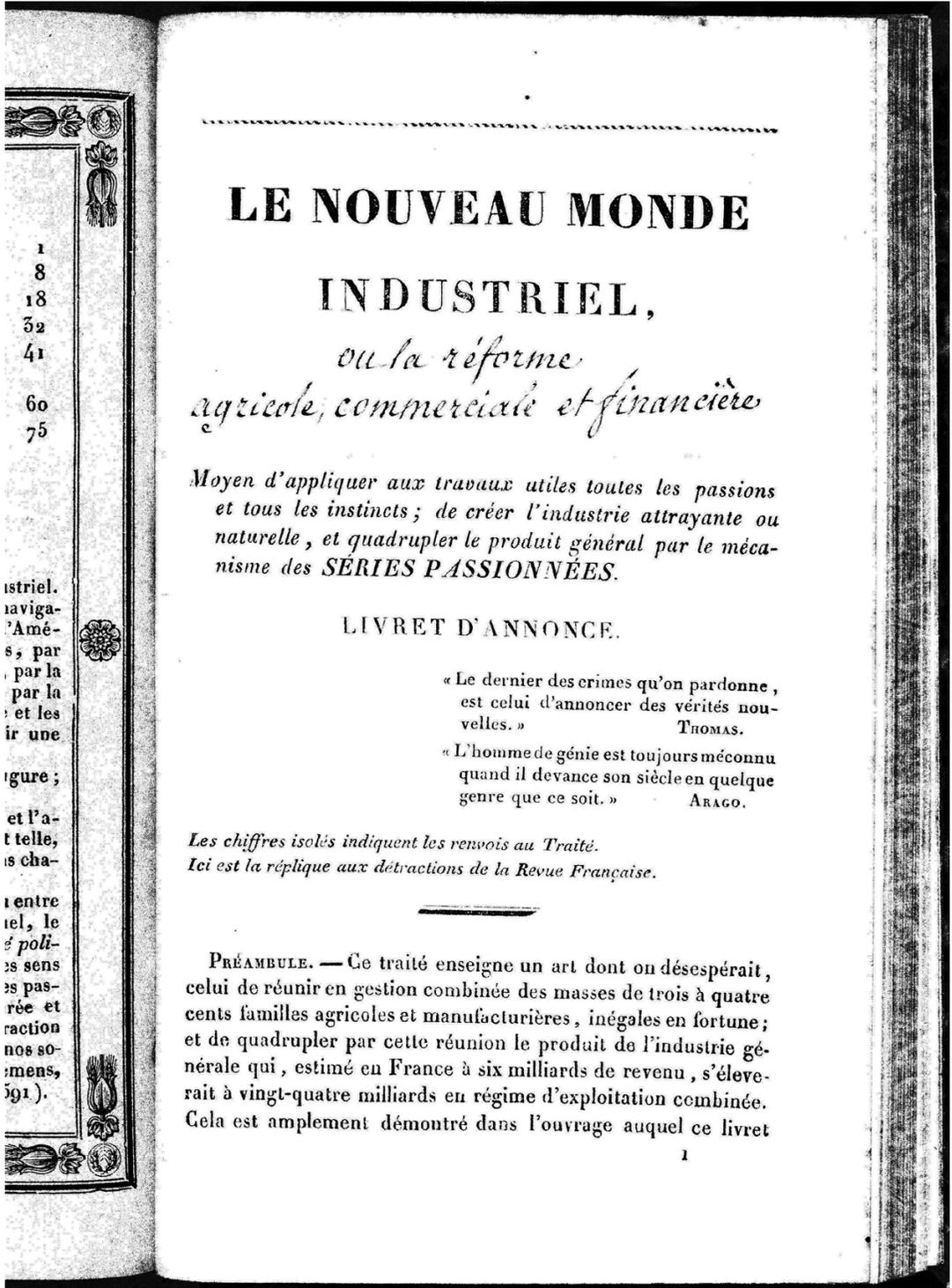
はっきり言えば、これはフーリエが本当に選ぼうとした題名がどちらだったか、といった問

²⁹ Anton Gerits, « Du rêve à la réalité », *For Bob de Graaf, antiquarian bookseller, Publisher, Bibliographer. Festschrift on the occasion of his 65th birthday*, edited by Anton Gerits, 1992.

³⁰ それぞれ正確には、Del Bo が作成した書誌の補遺と、Walch が作ったサン＝シモン主義の書誌の補遺である。Anton Gerits, *Additions and Corrections to Gieuseppe del Bo's "Charles Fourier e la Scuola Societaria"*, Hilversum, 1983. Id. *Additions and Corrections to Jean Walch : "Bibliographie du Saint-Simonisme"*, Gerits, 1986.

³¹ 正確にいうと、小さな共同体の形成が社会転換に繋がるという構想は当初からもっていたが、それを共同体実験というかたちに定式化したのが1820年代だった。

図3 『産業の新世界』の販売促進のために記された『告知小冊子』。「L' AGRICULTURE COMBINÉE (組み合わせられた農業)」という副題が、付箋によって、「la réforme agricole, commerciale et financière (農業・商業・財政改革)」と修正されている



LE NOUVEAU MONDE

INDUSTRIEL,

*ou la réforme
agricole, commerciale et financière*

*Moyen d'appliquer aux travaux utiles toutes les passions
et tous les instincts; de créer l'industrie attrayante ou
naturelle, et quadrupler le produit général par le méca-
nisme des SÉRIES PASSIONNÉES.*

LIVRET D'ANNONCE.

« Le dernier des crimes qu'on pardonne,
est celui d'annoncer des vérités nou-
velles. » THOMAS.

« L'homme de génie est toujours méconnu
quand il devance son siècle en quelque
genre que ce soit. » ARAGO.

*Les chiffres isolés indiquent les renvois au Traité.
Ici est la réplique aux détractations de la Revue Française.*

PRÉAMBULE. — Ce traité enseigne un art dont on désespérait,
celui de réunir en gestion combinée des masses de trois à quatre
cents familles agricoles et manufacturières, inégales en fortune;
et de quadrupler par cette réunion le produit de l'industrie gé-
nérale qui, estimé en France à six milliards de revenu, s'éleve-
rait à vingt-quatre milliards en régime d'exploitation combinée.
Cela est amplement démontré dans l'ouvrage auquel ce livret

いを提起するものではない。特定の誰かのための献呈用の本を目の前にしてなにか修正点がないかと鵜の目鷹の目で見たととき、題名がどうにも気になった、ということであって、真の題名が何か、ということではない。従って、これはフーリエの理論にかかわる問題ではない。しかし、題名をめぐる逡巡する、あえていえば右往左往するこうした態度は、確かに、フーリエの大きな特徴といえる。この態度を私はあるところで、「書きながら考え、考えながら書く」態度だと述べたことがある³²。これは理論以前の一種の心的な態度と呼べるものだが、まだ理論になっていないという意味で重要でないのではなく、むしろ理論を下から支え、理論の前提になっているものとして重要なのである。

研究者にとって、テキストを読むだけではなく、実際の本を、しかも何種類も読むことが大切なのは、こうした、理論の前提になっているものへの感受性を育むことができるからである。

つぎに、フーリエ主義者たちがさまざまなイベントに際して発行した文書をコルヴェア文庫からいくつか見てみたい。実際、ヴィクトル・コンシデランの結婚式の案内状や、フーリエの死亡通知や葬儀に関する案内状、コンシデランの肖像写真など、さまざまな資料がコルヴェア文庫には含まれている³³。社会史や運動史の観点からみれば、さまざまなイベントを通してフーリエ主義者たちが結束を強めていったことが、これらの資料を通して容易に理解できる。

もうひとつ紹介したいのは、同じく『産業の新世界』の出版の際に、宣伝用の冊子として作られたもので、著者はフーリエ自身ではなく、彼の信奉者であり後援者だったジュスト・ミュイロンである。

この資料を掲げた理由は、これが稀覯資料だからというだけではない。これが合本されているという理由である。このパンフレットの他に合本されているのは、ミュイロンの『新社会論』などだった。

誰が合本したかはわからない。ゲーリッツによれば、コルヴェア文庫のほとんどの図書はベルンシュタインが引き取った後にパリの職人に製本させたものようだが³⁴、それはコルヴェアの死後手入れする人のいないままになっていた本が傷んで、元の製本が使い物にならなくなっていたためらしい。しかし、合本というかたちにしたのがベルンシュタインかどうかは別問題である。それ以前から、このようにまとめられていたのかもしれない。大事なのは、このようなグルーピングが可能だったということである。『産業の新世界』というフーリエの著書の宣伝文が、フーリエの著作の脇にはなく、宣伝文の著者でありフーリエ主義の中心人物のひとりだったミュイロンの脇に置かれるのである。フーリエは決して単独では読まれず、

³² 福島知己「シャルル・フーリエ『四運動の理論』初版の異刷について」、『一橋大学社会科学古典資料センター年報』30号、61-72頁、2010年。

³³ 案内状には宛名が記されていないから、おそらく実際に送付されたものではなく、印刷したまま余った残部を譲り受けたものと考えられる。

³⁴ 製本や装丁をもとに、ベルンシュタインが流通にかかわった古書がある程度推測できるかもしれない。

フーリエ主義に包摂されて読まれていた。合本という形式がこのような繋がりを可視化しているという点が重要ではないかと思う。異なる関係づけによって、別のオリエンテーションがうまれるのである。

文庫には、フーリエ主義者たちがアルジェリアでおこなった共同体実験に関する詳細な報告書なども含まれていて、一次史料として非常に貴重なものである。フーリエ主義の共同体実験で最も有名なのは、1832年にパリ近郊のコンデ＝シュル＝ヴェグルでおこなった実験や1840年代のアメリカ合衆国における共同体建設を除けば、シトー会修道院を買い取っておこなわれたものと、アルジェリアのオランという都市の近くにあるシックという地域でおこなわれた実験である。アルジェリアのフーリエ主義共同体については Fernand Rude が研究論文を残しているが³⁵、その一次史料となる議事録がコルヴェア文庫に含まれている³⁶。

最後にまとめるならば、文庫に収められているひとつひとつの文献だけではなく、文献がどのように合本されているか、さらにその図書がどうして文庫にまとめられているか、といった問いが、書物の受容を考えるうえで大きな手掛かりとなりうるし、それを考察することを通じて新たな研究へと導かれる可能性がある。つまり、「文庫」そのものが一個の研究対象となりうるといえる。この点で早稲田大学は電子目録に巧妙な工夫をしている。Corvaia という言葉で検索すると、書誌が6,196件列挙される。このうちコルヴェア文庫の展示会の資料が一件あり、別の Corvaia という人物の本が1件あるが、残りは Corvaia 文庫に収録されている資料である。このように、なんらかの工夫によって、文庫単位のまとまりが可視化されることは大いに意味があると考えられる。

³⁵ Fernand Rude, « Les fouriéristes lyonnais et la colonisation de l'Algérie », *Cahiers d'histoire*, t. 1, 1956.

³⁶ フランスは1830年代からアルジェリアの植民地化を開始している。その最初の時期に、サン＝シモン主義が果たした役割については比較的よく知られている。アンファンタンの率いるサン＝シモン主義グループがアルジェリアの視察をおこない、その成果をもとにアルジェリア植民を建白することになるからである。フーリエ主義者はいくつかの点でサン＝シモン主義者の動きをなぞっているが、アルジェリアとの関係についてもその一例と言える。サン＝シモン主義とアルジェリアについては以下を参照。平野千香子『フランス植民地主義の歴史 奴隷制廃止から植民地帝国の崩壊まで』人文書院、2002年、特に第2章「カリブ海からアルジェリアへ イスマイル・ユルバンを通して」。フランス領アルジェリアについては、工藤晶人『地中海帝国の片影 フランス領アルジェリアの19世紀』東京大学出版会、2013年、も参照。